SUNDAI KOFU

「挑戦心」にじむ、考える姿勢

「愛情教育」を建学の精神に掲げる学校法人駿台甲府学園（甲府市塩部2丁目、山﨑善久理事長）は、小中学校・高校の12年間にわたり一貫教育を実践している。さまざまな学習機会を増やし、自らの考えを深めるチャンスを提供。小中高生が接することから生まれる心身の成長にも力を注ぎ、児童・生徒のチャレンジング・スピリットを育んでいる。

学び深め 平和の思い新た

駿中修学旅行事前学習

「過去は変えられなくても、未来は変えられる」「戦争は命だけでなく希望までも奪ってしまう」「唯一の被爆国として日本には責任と使命があるはず」―。駿台甲府中（八田政久校長）の2年生は、13日から始まる修学旅行の事前学習として年間を通し、広島の原爆などについて学びを深めてきた。戦争からは何も生まれないことを分かっていても、怖いものから目を背けたくなることが多かったという生徒たち。学習を通し、一回りも二回りも大きく成長し、確かな目標を持って修学旅行に臨む。

歌語りに涙こらえる

「大事な未来を築いていく時間と思って、広島であった72年前の話を出会った80歳になる男性の現在までを歌ったもの。戦争、終戦当時の貴重な映像も織り交ぜた。また、原爆で大切な家族と11歳で死別した男児が、一人で4年間頑張った末、母を求めて自ら死を選んだ際の思いがつづられた遺書も読み上げられた。

歌と映像の歌語りに涙をこらえる生徒たちも。『人は支え合って生きている』ということは『知識』として持っていました。しかし、歌語りを通し、（主人公やその家族を）自分や自分の父母に置き換えて想像し、初めて『実感』することができました」と田中真愛さん。木田樹里さんも「頭の中に情景が浮かびました。怖くて忘れたいと思いましたが、それではいけないことを学びました。悲しさ、つらさ、悲惨さを後世の子どもたちに伝え、二度とこのようなことをしてはいけないということを伝えていくのが私たちの使命と感じました」。

公演後の帰路で、友人と初めて戦争について話したという男子生徒や、原爆から約70年しか経っていないのに日本が戦争に参加することになるかもしれない状況に疑問を持つ女子生徒、今もなお苦しみ続ける人がいる現実に衝撃を受けた生徒も。

「（戦争や原爆のことを）日本人として知らなければいけないと決心し、目を背けていた事実としっかり向き合おうと決めた」「科学が進歩しても人のためにならなければ意味がなく、核兵器づくりに使うなど決してあってはいけないこと」と思いを語る生徒たち。大人たちによる戦争で、夢や希望をかなえられずに亡くなった子どもたちの気持ちをおもんばかる生徒たちも多かった。

生まれた場所や時代によって環境が変わることから「今こうして幸せに生きていることが本当に紙一重に思えてくる」と依田優太さん。戦争のない世界づくりのために、世界中に友だちをつくるという山本さんの提案に賛成する生徒たちもいた。岡部夏妃さんは「戦争で戦うのも、やめることを進言していくのも私たち」、修学旅行実行委員長の村松亜璃紗さんは「当たり前の生活がどんなに大切なことかを痛感しました。

戦争への恐怖が薄れつつあると感じる現代にあって、修学旅行を通じて今後、私たちが何をすべきかをしっかり学んできたいと思っています」と表情を引き締めた。

肌で感じる広島原爆

駿中の修学旅行先に広島が加わったのは2006年から。今回の事前学習は、当時からつながりのある広島市から被爆しながら生き続けるアオギリが実らせた種を発芽させて成長した苗木「被爆アオギリ二世」を譲り受け、植樹した昨春からスタート。

社会や英語、美術のほか、土曜日のチャレンジングサタデーや夏休みにもさまざまな形の学習に取り組んできた。県内に在住する被爆者から体験談を聞き、その後、被爆アオギリをテーマにした映画「アオギリに託して」を鑑賞するなどしてきた。国語では映画鑑賞後に俳句を創作。優秀作品に選ばれた渡辺藍斗さんの「時経ても燃える樹木の影消えず」は植樹した被爆アオギリ二世に添えられた。

社会科担当の影山正美教諭は「一つの事実を知ってもらい、他人事ではないことを肌で感じてもらいたいと願っています」。学年主任の中村圭世教諭は「今年の修学旅行では山本さんの紹介で、現地で活動しているボランティアガイドさんを紹介してもらいました。良いと思うものは積極的に採用し、生徒たちに提供するのが駿台流。その中から生徒たちが考え、思いを育み、行動に移してもらいたいと考えています」と期待を寄せていた。

①広島への修学旅行で出会った外国人へ贈ろうと折り鶴を作る生徒たち②折り鶴に平和へのメッセージを英語で書く③クラスごとにメッセージを込めて折り鶴で表現④駿中2年生を前に、広島の原爆をテーマにした歌語りを披露する山本晴美さん⑤山本さんの歌語りに聞き入る生徒たち
＝駿台甲府今井キャンパス

駿小音楽祭

迫力ある演奏、息の合った歌声 小・中・高生が心を一つに披露

日ごろの練習成果を発揮する駿小生たち

ホールに響け歌声と楽器の音色―。駿台甲府小（坂本宏行校長）は2月、甲府・コラニー文化ホール（県民文化ホール）で吹奏楽部と合唱部による「駿小音楽祭」を開催。駿台甲府中吹奏楽部と合唱部、駿台甲府高吹奏楽部と管弦楽部も〝友情出演〟し、小中高生が一堂に会して音楽祭を盛り立て、父母ら観客を魅了した。

日頃の練習成果発揮

小学4年生以上の児童を対象にした放課後のクラブ活動の充実を目指し、それまであった運動部門に加え、初の文化部門として2008年に吹奏楽部が誕生。音楽祭は13年に合唱部が加わったのを機に、日頃の練習成果を発表できる場をつくろうとスタートした。

3回目の開催となったこの日、最初に合唱部が登壇。合唱曲「友だちだから」でスタートすると、テレビアニメ「忍たま乱太郎」の挿入歌「世界がひとつになるまで」やディズニーメドレーを披露。最後は、歌手の故坂本九さんの楽曲で、タレントのつるの剛士さんらがカバーした「心の瞳」を駿中生とともに合唱した。

一方、吹奏楽部は文部省唱歌「富士山」をはじめ、フランス民謡の「クラリネットをこわしちゃった」や「キラキラ星」を奏でた後、中学生とともにスタジオジブリ映画「猫の恩返し」の主題歌にもなった「風になる」を合奏。澄んだメロディーを響かせた。

本年度は、同好会から部に昇格したばかりの駿高管弦楽部が県代表としてひろしま総文祭器楽・管弦楽部門に出場し、高評価を博したのをはじめ、駿中吹奏楽部は創部11年目で悲願の西関東大会に県代表として挑んだなど〝駿台音楽イヤー〟。高校生のバイオリンの澄んだ音色に心癒やされ、中学生のメリハリある演奏に心躍らせ、陽気なリズムに場内は一体となり盛り上がった。

先輩の演奏に瞳輝く

先輩たちが奏でる演奏に児童たちの目も輝く。「中学生の演奏を初めて間近で聴き、感動しました。駿高にいる姉の影響もあって吹奏楽部に入りましたが、もっともっと頑張りたいと思いました」と話すのは吹奏楽部副部長の松野由琴さん（6年）。合唱部部長の田村寛子さん（6年）は「4年生の時にちょうど部ができ、歌うことが好きで入りました。中学生と一緒に歌え、駿中に行ってからのいい目標ができました」と笑顔を見せた。

「人前で発表するのはわくわくします」と話す合唱部副部長の吉澤佳乃子さん（6年）は「私たち6年生を支えてくれた4、5年生に感謝。思い出に残る合唱ができました」。小学校最後の舞台を前に緊張したというホルン担当の高野美咲さん（吹奏楽部）は「直前練習で仲間がやってくれた『駿台エール』でリラックスできました。練習より納得いく感じで吹けてうれしかったです」と頬を紅潮させた。

4人ともに駿中で合唱部、吹奏楽部に入部する予定で「もっともっと上を目指して頑張ります」と口をそろえる。後輩へ向けては「努力していれば必ず花開くので努力を忘れないで」「後輩たちを誘って部員を増やせばもっと活動も広がるはず」「先生のアドバイスをよく聞いて」「コミュニケーションが一番大切。学年の枠を超えて、今まで以上にたくさん話し合い、仲良くしてほしいです」とエールを贈った。

坂本校長は「発表の場を重ねることにたくましくなる児童たちは頼もしい存在です。中高生と同じ舞台に立って交流できるのも一貫校の良さ。心を育む上でも重要な場と考え、さらなる充実を図っていきます」と話していた。

駿中生と同じ舞台で演奏・合唱する駿小吹奏楽部（写真上）と同合唱部（同下）

華麗なる演奏を披露する駿中吹奏楽部（写真上）。澄んだ音色を響かせた駿高管弦楽部（同下）
＝いずれも甲府・コラニー文化ホール

3年生へ贈る黒板アート ―駿高美デ科―

放課後、制作に励む1、2年生たち（写真上）。黒板アートをバックに記念写真を撮る3年生たち（同右）
＝いずれも駿台甲府高美術デザイン科

卒業証書を握る手が織りなしてきた3年間―。駿台甲府高（八田政久校長）美術デザイン科で2月に開かれた予餞会（3年生を送る会）当日、1、2年生有志による黒板アートが披露され、3年生に笑顔が広がった。

3年の一木麻由さんは「見た瞬間、胸にジーンときました」。昨年は先輩たちに隠れて懸命にはなむけの黒板アートを描いた一人だったこともあり、「その過程を知っているだけに1、2年生の気持ちがすごくうれしかったです」と満面の笑みを見せた。

黒板アートは放課後に3日間かけて制作。原画を描いた廣瀬桜子さん（2年）は「卒業証書を持っている手はこの3年間、筆を持って絵を描いたり、勉強したり、さまざまなことを体験してきた大切な手。そんな3年間を表現しました」。色づけの中心となったのは坂本美果さん、清水優衣さん、鹿野凌介さんの2年生で、1年生の有志とともに色を混ぜたり、テッシュでこすったりしながら、立体感が出るように工夫。色ムラが出ないように何度もチャレンジしてきたという。

「気軽に話し掛けてくれた先輩たちは心強い存在でした」と坂本さん。清水さんは「先輩から絵の面白さ、楽しさを学びました。今度は後輩たちから学ばれる存在になれるよう努力していきたいと思っています」と誓っていた。

1、2年生有志による3年生へ贈る黒板アート

〈企画・制作／山梨日日新聞社広告局〉